

## 不正な管理人～希望への挑戦 ルカによる福音書 16 : 1 - 13

16:01 イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。 16:02 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』 16:03 管理人は考えた。『どうでしょうか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。 16:04 そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』 16:05 そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあのか』と言った。 16:06 『油百バツ』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バツと書き直しなさい。』 16:07 また別の人には、『あなたは、いくら借りがあのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』 16:08 主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。 16:09 そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。 16:10 ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。 16:11 だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せられるだろうか。 16:12 また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。 16:13 どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

ナチス・ドイツに投獄されたボン・ヘッファー牧師が、獄中で一番辛い事は希望を持つことだと、手紙に書き送ったそうです。希望を持つことは、実は辛いことです。実現がもうすぐ目の前に見えている希望なら、さほど辛くはないでしょう。けれども大きな希望の場合、「実現ははるかかた」という場合は、それを抱き続ける事は簡単ではありません。希望と現実とのギャップに苦しむこととなります。本当に実現するのだろうかという不安と、現状が受け入れられないという不満。希望は、未来を不安なものにし、現在を一層不満なものにするのです。たとえば浪人生。目指す大学に果たして合格できるのだろうかという不安。そして浪人という中途半端な状態にいる自分を日々否定し続ける不満足感。苦しい日々です。ですからある意味、希望を持つということは、苦しむ覚悟も必要になる、といえるでしょう。歳をとればとるほど、遠大なことに我と我が身を賭ける事は、難しいひとつのチャレンジになっていきます。

ルカによる福音書は、世界が変わるといふ、はるかな希望の中で書かれています。どのように変わるのか？ それはつまり、冒頭のイエスの母マリアの言葉にあるように、「思い上げる者を打ち散らし、権力のある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」という革命的な変化です。イエス自身も「後の者が先になり、先の者が後になる」(13:30)、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」(18:25) と言っているように、イエスがもたらす変革は貧しい階層のためのものであるという考えが、宴会の喩えや、徹底した財産放棄の勧め、見失った羊の喩え、無くした銀貨の喩え、放蕩息子の話などで縷々語られます。このように富の問題はルカによる福音書の一貫したテーマとなっているのですが、その訳はこの福音書を描いたルカ自身が豊かで教養のある階層の人であったということが関係しているようです。ルカがそういう人であったという事は、この福音書の冒頭のテオフィロなる高位の人物への献呈の言葉でも分かります。豊かな階層のクリスチャンが、イエスの宣べ伝えた神の国、貧しい者の救いの希望を信じたということは、どういうこ

とでしょうか？ 実はそれが今日の聖書の箇所为主题となっています。つまり、金持ちがいかにしてクリスチャンであることができるのかという問題です。

このたとえばなしは放蕩息子の話の次に置かれています。放蕩息子とはふしだらな生活をして自業自得となったと考えられていた人々、当時の貧しい階層の人々を代表しています。飢饉などで田舎から都会のエルサレムに流れてきて定職も定住地もない人々、今でいうホームレス、女子ならば遊女、或いは障害者、ライ病人・・・こうした人々は律法に従わない生活をするからこうなったと考えられていました。この人達が神に愛され救われる、というのがイエスのメッセージでした。これに対して不服を申し立てたのが品行方正な兄で、裕福な階層を代表しています。貧乏人は真っ先に救われる。では、金持ちは、神の国が来たときにどうなるのか？それが今日の箇所の関心事です。実は今日の箇所の後に悔い改めない金持ちの運命が書かれています。金持ちとラザロの喩えで、金持ちが地獄の炎の中でもだえ苦しんでいる様子が描かれています。永遠の罰です。「金持ちが救われるのは、らくだが針の穴を通るよりも難しい。」ではどうすれば救われるのか？当時の教会にとって、これは大きなテーマでした。

当時金持ちの中でクリスチャンになった人々には、自分たちの豊かさに対するある種の後ろめたさの感情があったと思われます。今日の箇所では「不正にまみれた富」という言い回しが何度もできます。それは今日の私たちにとっても同じ感情があるのではないのでしょうか。私たちの豊かさは、貧しい国々の人々の犠牲の上に成り立っています。社会の構造が貧しい人を作り出している。それは当時も同じで、教養のある人々はその事を薄々感じ取っていたのでしょ。良心が痛んでいたのです。

ですから、「会計報告を調べられたら大変なことになる。」と、驚きあわてて、大丈夫のように手を打った管理人・・・それは「神の国がきたら大変なことになる。」と、良心の痛みを感じている自分たちのことだったのです。主人というのは神様で、人々の負債、つまり神との関係が疎遠になっている状態ですね(この状態を聖書では「罪」と呼ぶわけですが)、そういう罪人の生活の破れを少しでも繕い、苦しみを少しでも軽減してやろうと身を粉にして働く姿が描かれています。

16:05 そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。 16:06『油百バツ』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バツと書き直しなさい。』 16:07 また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』

イエスの厳しい要求にしたがって全財産を放棄してしまうのは恐ろしい。かといってこのままノホンとしているのは良心が痛む。そんなジレンマを抱えた人々に対して、「不正の富」を使って貧しい人々を助けるという生き方のある事を示しているのです。不正の富の有効利用とでも申しましょか。実際イエスの周囲にはこういう人達、特に婦人たちがいて、弟子集団の生活を支えていました。今風に言えばパトロンですかね。

でもこうしたパトロンたちが、これで安心、神の国に入れると思っていたわけではありません。実際全財産を駆使して働いても、貧しい人々はいなくならなかったし、良心のうずきもなくならなかった。やってもやってもほとんど成果は出ない。施しても施しても焼け石に水。初代教会は貧民救済の活動を行っていました。それはエルサレムの教会に限らず、各地の教会が募金会堂を精力的に行っていたのです。紀元300年ごろにはその財政はローマ帝国の財政に匹敵するものに膨れ上がっていたといわれていますから、いかに精力的であったかが分かります。しかしそれでも、社会の構造は変わらない。おそらく今日の社会事業と同じように、やればやるほど問題が見えてくる、そんな状況だったことでしょう。イエスの宣べ伝えた神の国は、徹底的なものでした。それは14章25節以下のイエスの言葉からも分かります。中途半端なことでは神の国の戦に打ち勝つ事はできない。塩気のなくなった塩は捨てられるだけなのです(14:34-35)。自分たちの努力がちっとも実らないという状況があったのです。

それでもこの豊かな階層は、その豊かさが役に立たなくなる神の国が到来したときに、居場所を持つことができると告げられます。彼ら不正な管理人たちは、すべての借金を帳消しにする事はさすがにできません。2割程度、できて半分。それでも膨大な借金です。それができるのは神ご自身です。それでも、彼らの無益な働きではあっても、「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」と神は約束します。結局神の国は、人の行いによらないのです。「こんなもので何ができる」と思われるような「からし種」で神の国が来るのです(13:18-19)。

「神の国が到来する。その時、貧富の差がなくなる。」という希望・・・はるかかなたの希望です。だから苦しみも大きい。ジレンマもある。理想と現実とのギャップを思い知らされる。とても生きてるうちに到達できそうにないと思うと、やる気も出ない。当初のうきうきした気持ちはもはやないかもしれません。「こんなにかんばったのに、まだダメだったか」と、がっかりすることもあったでしょう。それでも、そんな苦痛を抱えながらも、はるかかなたを仰ぎ望みながら、手元の小さな働きをコツコツと行っていく！「ごく小さなことに忠実な者は、大きなことにも忠実である」(16:10)。この初代教会の希望は、私たちの希望でもあるでしょう。自分の生きていくうちに到達できるもの、成し遂げられることは少ないかもしれませんが、それでもその方向に身を伸ばして生きていきたいものです。